

# 吹田市民の戦争史②

吹田市金田町にお住まいの小原吉男さん(83歳)は、昭和18年に召集され、中国南部で終戦を迎え捕虜となった経験を持つ。20歳から衛生兵として従軍し、いつもの「生死の境目」をくり返して来られた小原さん。「私の青春は全て戦争に奪われてしまいました。戦争だけは絶対にやったらあきません」。老いてなお、戦時中の強烈な記憶を語ることは、つらいこと。60年の歳月を経ても、まだ癒えることのない戦争の断片を語っていただいた。



小原 吉男さん  
(金田町在住)

## 戦争は絶対にやったらあきません

### 喜ぶのは軍需工場だけです

**Q** 昭和18年12月に召集され、南方へ。中国大陸に向かったのですか？

広島の宇品港から船が出ました。夜中に出港、朝甲板から外を見ると、なんと48隻もの船が、駆逐艦と戦闘機に守られながら4列縦隊で南へ進んでいる。沖縄の近海で、最後尾の船がアメリカの潜水艦に撃沈されました。台湾近海でもまたもや最後尾の船がやられました。私の船は無事だったので台湾の高雄に到着しました。

**Q** 台湾で衛生兵に？

いえ、配属されたのは香港の陸軍病院でした。当時は沖縄戦の直前で、香港の

飛行場を中心に連日のように激しい空爆。ひどい時は空襲は24時間も続き、私の仕事は、大量に運び込まれてくる人が病院へ収容し、亡くなった人を焼く。この繰り返しでした。

**Q** 戦争犠牲者を手当てされていたわけですが、重傷者も多かったのですか？

いわゆる「ダルマ」患者がいました。手足4本とも吹き飛ばされ、胴体だけになっている。それでも息があるんです。「かめ」に入れて内地の病院へ送りました。「かめ」に入れないと、安定しないので、船の中で転がってしまうからです。その方は20歳前後の青年でした。お

そらく「いつそ殺してくれ」と思っていたでしょうね。

**Q** 香港で終戦を迎えるのですか？

香港の病院が患者で一杯になったので、黄浦という所で終戦を迎えました。

**Q** その後「捕虜収容所」へ？

そうです。一番怖かったのは朝です。アメリカの捕虜や中国人たちが私たちの顔を見て「こいつに殴られた」「この人に暴行を受けた」と証言していく。名指しされた「B、C級戦犯」は、軍事裁判にかけられ、最悪の場合絞首刑です。

**Q** 収容所にはどれくらいおられましたか？

1年間いました。衛生兵の経験があるので、収容所の中に療養所が出来て、私は病人の看護をしてましたから、引き揚げが一番最後になりました。

捕虜になる直前「証拠品は全部燃やせ」との指示で、軍人手帳や戦友たちと撮影した写真などは全て燃やしてしまった小原さん。「惜しいことしたな。今では戦友たちもたくさん亡くなってしまつて、写真あれば思い出すこともあるのにな」と残念そうに語る。戦争は青春も思い出さず奪ってしまうものなのだ。

ントを渡してゆつくり話も聞かずにサヨナラ(笑)。じつくり腰を落ち着けて話し合うことがほとんどなくなりました。

**有田** 障害者福祉計画の説明会でも、最初から吹田市当局は「出来ることは限られてますよ」と、言い切ります。予算上困難な中であつても、ちゃんと話を聞いて、何とかひねり出せる方策はないか、市民ニーズに応えるために汗をかこう、と考えるのが「市民本位の行政」だと思うのですが。

**小川** 予算の話ではなく、現実のニーズ、障害者の生存権の問題なのです。紫金山公園の整備に何億円もの予算を組むことが本当に必要なのではないか？

**有田** 紫金山公園だけでは無いですよ。吹田市は操車場跡地開発に総事業費で1000億、地下鉄延伸に500億円の開発しようとしています。東部拠点の基盤整備だけで30億円の税金を使うのですから、財政を圧迫します。これで福祉は守れるのか、と不安の声が出るのも当然です。

**鈴木** そんな中で障害者運動は確実に変化してきました。今までは障害者を抱える親たちの運動が本流でしたが、今や事業所自ら

が立ち上がっています。障害者「自立支援」法という名前の「自立阻害」法が施行され、施設そのものの運営が立ち行かなくなってきたのです。

### 「自立支援」法の施行でバラバラの団体が一致団結

**小川** 「自立支援」法の施行で、唯一良かったことは、それまでバラバラに障害者支援をしていた団体が、「これはたまらん」(笑)と一致団結できたことです。今の法律では、障害者と施設の負担が増えるので、せっかく社会参加できていた障害者が、また家に逆戻りせざるを得ない悪法だと思えます。

**有田** 国や府が弱者切捨て政治を強要してくる中で、障害者の生活を守るといふ吹田市の役割は、本来は大きくならざるを得ません。最後に吹田市に対して「これだけは」という願いがあればどうぞ。

**鈴木** 3年間もショートステイ

を渡り歩いている仲間がいます。

他の施設がどうしても受け入れてくれないから「あいほうぶ」を中心に3年間も根無し草の生活。吹田市はこのようなケースが現実存在することを認識し、何らかの対策を立ててほしいと思います。この方が安心して入所できる施設があれば、あとに続く方とその家族の安心にもつながりますから。

**小川** 吹田市には「もっと長期的なビジョンを持ってほしい」と思います。障害者福祉計画では47人の精神障害者を病院から地域に連れ戻す、となつていますが、現実に地域にその受け皿がありますか？厚生労働省から割り振られた数字だけで計画を立てていませんか？われわれ現場の声をもっと取り入れた、本当に血の通った障害者福祉計画に作り変えるべきだと思います。平形 榎坂病院で、精神障害者のニーズ調査が行われました。彼らの不安は「退院したら日常生活が出来るのか？」というもので、誰に相談すればいいのか、とい

う不安ですね。そんな状態で47人を地域に戻すことが可能ですか？地域で人間らしく生活できるように基盤を作らないで、ただやみくもに47名を戻すというのは、罪作りだと思います。精神障害者は心の優しい方が多いので、本当に地域に受け皿があれば、お年寄りの話し相手になったり、車椅子を押すボランティアをしたり、そんな人と人とのふれあいの場を地域で作ることなしには、計画は絵に描いた餅だと思います。

**有田** そうですね。国や府の予算が削減される中、本来頼りになるのは住民と一番距離の近い市町村のはずです。せめて現場の声をよく聞いて福祉や医療の整備計画を考えるべきなのに、肝心の市民の声があまり反映されずに計画だけが独り歩きしているのは悲しいことです。住民の要望を取り入れるという、原点に帰った市政運営が求められていると思います。本日は長時間ありがとうございました。

## 頼りになる市町村こそ現場の声を聞いて